

目 的

現在、小学校では全国の約98%の学校で昼食に学校給食が実施されている。しかし、中学校では50%台に実施校が減っている。大阪府下の公立中学校でも、中学校で学校給食が実施されている例は少ない。中学校生徒は体格的にもまた精神的にも変化の大きい時期である。このような中学校生徒を対象に、昼食に着目して、その他の食事の状態や、身体の状態を比較検討し、成績を得たので発表する。

方 法

- (1) 対象：大阪府下在住の13～14歳児 150名（男子75名，女子75名）
- (2) 期間：1988年6月
- (3) 調査方法：昼食に学校給食がなく、学校食堂を有する公立中学校2校より無作為抽出した150名に、調査日の昼食により、A. 家からの弁当持参，B. 学校食堂利用，C. 市販の弁当とパン持参，D. 食べないの4群に分け、昼食の内容及び、朝食、夕食、夜食の有無、さらに身体の状態について、それぞれ割合を算出し比較検討を加えた。

結 果

- (1) 夜食に関しては、食べない回答がA、B群とも、それぞれ83.6%、87%と比較的多い割合を占めたが、その他の食事に関しては特異な傾向は認められなかった。
- (2) 身体の状態に関しては、A群とその他の群に分け、身体的不調に関する14項目のうち、2以下と3以上の回答別に割合を算出し χ^2 検定を行ったところ、全体及び、男子に関して危険率5%以下で、A群の方が身体の不調を訴える者が少ない傾向を認めた。